

越前・美濃地方に現存する能の舞台の造形

横山 勉*

A study of the formative elements of existing Noh stages in the Echizen and the Mino region

Tsutomu Yokoyama

The Echizen and the Mino region are the areas of the Hakusan faith, and the Shinji Noh is handed down. The width of the Shinji Noh stage is somewhat smaller than the samurai's full-scale Noh stage. The Shinji Noh stage doesn't add the gorgeous ornament, but is the simple and the seemly modeling. The space composition which unifies the space to dance of the Shinji Noh and the space to appreciate is made. In the area which has much snow and where the cold is severe, the Noh stage is built in the front shrine and the suitable original stage space is created by the Shinji Noh.

1. はじめに

能の大成後、能は武家の式楽として江戸時代に完成期を迎えたが、室町以前から地方において猿楽能を継承した神事が伝承¹⁾されたものも少なくない。演能空間として本格的な武家の豪壮なものではなく、尊崇信仰による端正な造形の舞台がある。越前・美濃は白山信仰の地域であり、神社で盛んに猿楽能が行われ、その神事に関わる伝統芸能として、鶺鴒神社(水海)、白山神社(能郷)では地区の氏子によって神事能が伝承され、昭和51年(1976)に国指定重要無形民俗文化財²⁾となった。同様な指定を受け、鶺鴒神社と同じ拝殿形式の能の舞台をもつ春日神社(黒川)で奉納される神事能がある。職人集団の刀鍛冶奉納による神事能が嘗て行われた舞台が関市の春日神社にあり、能舞に相応しい造形をもつ舞台である。支配階層の影響が及ぼされた式楽の能の舞台と違い、五穀豊穡・家内安全等の祈禱的な芸態をもつ神事能による、地域に生きた造形を読み取ることができると考える。越前・美濃地方に現存する能の舞台をもつ鶺鴒神社(水海)、白山神社(能郷)、春日神社(関)、鶺鴒神社と同様に、雪深く寒さ厳しい地域の中で拝殿形式の能の舞台をもつ春日神社(黒川)を対象に、地域的・文化的環境に注意を払い、実測調査を中心として、その造形概要を述べるものである。

2. 鶺鴒神社

池田町は能楽の里と呼ばれ、田楽能舞³⁾を伝承する水海鶺鴒神社をはじめ、多くの能に関する文化

* 建設工学科 建築学専攻

財を保存する田楽・猿楽・能楽の地である。能郷白山を頂く越前・美濃境の峰々からの流れは足羽川となって池田町を貫流し、福井平野を経て九頭竜川と合流し日本海へ注がれている。池田町東北に足羽川の支流である水海川の右岸に水海集落が形成され、その中程に、集落の鎮守の鶯甘神社がある。池田の能に関わる伝承には北条時頼からの伝授説があるが、白山社に対する尊崇信仰が強い土地柄と白山信仰に基づく能郷の能との関係を伝える神社能楽説⁴⁾が有力であり、美濃への街道による人的、物的交流の結びつきもあった。池田の能において、志津原、月ヶ瀬、小畑、水海、稲荷地区の神社では神事を奉納した記録が、文化12年(1815)に著わされた「越前国名蹟考」⁵⁾にあり、志津原白山神社、月ヶ瀬立石家、水海鶯甘神社、稲荷須波阿須疑神社には古能面が今に伝わっている。現在では水海の鶯甘神社の田楽能舞のみが伝承されている。2月15日に雪深く寒さ厳しい中で田楽舞4番と能舞5番の田楽能舞が拝殿の仮設舞台で奉納される。神事の最後「面納め」が終了すると、参加した人々は互いに「おめでとうございます」と言葉を交し、旧正月を祝うのである。宮座のような明確な組織はなく、宮司による翁(世襲制)以外は水海の住民の支えによって演じられている。舞人の禊が行われる水海川と直交する軸線上に鳥居、参道、拝殿、本殿と北東へ向って並び、山頂へと延びている。この神社の能の舞台は江戸城表能舞台の規範⁶⁾に沿ったものではなく、拝殿の中に仮設の舞台が設えられる独自のものである。通常の能舞台にある4本の柱はなく、拝殿の中央部に直径1,2尺の2本の丸柱が存在するのみで、演能時に目付柱、シテ柱の機能を果たしていると考えられる。

今立郡神社明細帳⁷⁾によると、明治32年4月21日の大火で間口六間奥行五間の拝殿が焼失し、明治40年3月7日改築許可と記されている。再び、昭和21年4月2日の大火で焼失し、昭和25年9月の竣工(拝殿内に竣工写真)に際して森田氏を中心に地元大工が役割を担い、拝殿の規模は以前の間取りを踏襲し、礎石の位置、石垣もそのままに使用したと伝わる⁸⁾。桁行六間、梁間五間、軒先せがいで造の入母屋造瓦葺きの拝殿は六分割された中央部後方二間×二間に円柱を廻らし上段とし、その手前に二間四方を中心とした能の舞台を設えている。上段正面左側を舞台正面とする床板の貼り方向は、江戸城表能舞台と一致する。

拝殿における中央前方にコの字に敷き詰められた畳、上段框で設えられた仮設の能の舞台(図-1)は18,0尺×16,6尺の矩形の拭き板床である。上段前方右側に囃子方(太鼓1人、大鼓1人、小鼓2

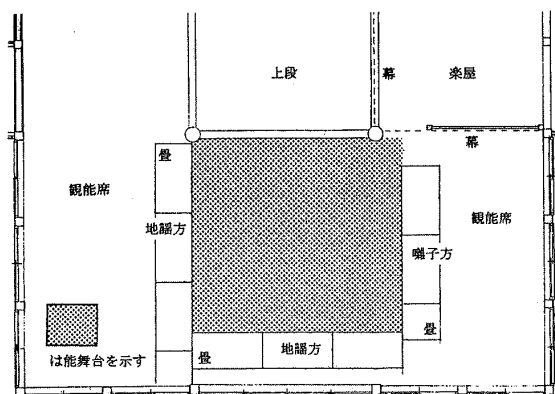


図-1 鶯甘神社拝殿仮設舞台平面図



図-2 鶯甘神社拝殿田楽能舞

人、笛2人)、上段前方左側と手前側に地謡方が舞台を囲むように控えている。囃子方、地謡方は畳に座し、床板手前1,5尺幅程度を使用しているため、演能空間は約15尺×15尺となり、三間四方の江戸城表能舞台より小さくなる。舞台には鏡板がなく四方から能を鑑賞でき、主に囃子方、地謡方の後方の広間から村人、一般客が観能する。上段正面右側後方が仮設間仕切りによる楽屋となる。舞台への出入り口幅は3,6尺で、橋掛りはなく、舞台と45度で接続する。能の舞台正面は90度回転した上段正面左側であるため演能終了時に神前に向き直ってから楽屋へ戻っていく。

拝殿の6間は天井高12,9尺の棹縁天井、床高0,68尺の上段を除いて同床高の拭き板で、観能と演能の空間が一体となった室内能の舞台である。雪深く寒さが厳しい地域における舞台空間構成のひとつと考えられる。明治時代以降、能楽堂における室内の能が盛んとなり、能舞台と観客席の構成は、拝殿を仮設舞台とする奉納能とは異なる風趣である。室内能の舞台として、国宝の奥能舞台や重文の表能舞台をもつ西本願寺書院において対面所下段中央部、白書院三の間、菊の間の3ヶ所にあった⁹⁾ことがわかっている。明治の大邸宅に組み込まれた能舞台として唐津の明治20年代竣工の旧高取邸の室内能舞台がある。

3. 拝殿形式による能の舞台類例としての春日神社

鵜甘神社同様に、雪深く寒さが厳しい地域における能の舞台として、黒川能¹⁰⁾を奉納する春日神社拝殿がある。黒川能は500有余年、春日神社への尊崇信仰の強い黒川地区の農民(氏子が能役者)の手によって日常生活の中で伝えられ、演じらる独自の強い高度な民俗芸能である。春日神社拝殿では2月1日、2日、3月23日、5月3日、11月23日に奉納能が行われる。2月1日、2日の王祇祭¹¹⁾が盛大で最も重要な行事である。「黒川能役者名鑑」¹²⁾によると上座、下座合わせて約150

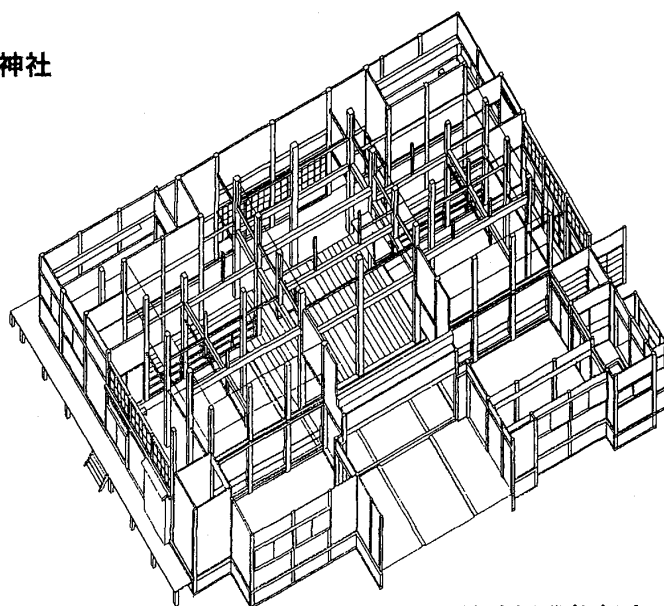


図-3 春日神社拝殿能舞台

名で民俗芸能を支え、時代とともに専業農家の役者は減少しているが、氏子で黒川能を伝承している。春日神社はJR鶴岡駅より南東8キロメートル程に位置する黒川大字宮ノ下にあり、黒川地区の氏子組織は春日神社を境として、南が上座、北が下座となり、それぞれの能舞を担っている。

春日神社拝殿は元文4年(1737)に竣工¹³⁾し、桁行十一間、梁間七間、前面三間向拝、軒先せがいで造の入母屋造銅板葺き(旧茅葺き)で、増改築等修繕を繰り返しながら、その形姿を現在に伝えている。拝殿内(図-3)に能舞台、橋掛り、楽屋、見所が整っており、本殿に向かって右側に上座、左側に下座の能座にそれぞれの舞台空間が用意されている。黒川能の舞台における独自の王祇柱と法印柱を結ぶ線の上座と下座に分かれ、左右の脇正面に相当する広間が村人、一般客の見所となる。見所は舞台横の板敷と0,83尺高い後方の畳敷がある。黒川能は上座と下座の対となっているところに最

大の特徴があり、能の舞台装置だけではなく、鼓役者の位置も下座において通常の能と左右対称の逆勝手となっている。

床高1,4尺の三間四方の本舞台は約8寸角の6本の柱で構成され、重厚な舞台空間となっている。本舞台の王祇柱の前に囃子方(笛方のみ他の囃子方と矩折れに座す)が並び、舞台の三方に籠提灯(王祇祭)が据えられ、その結果、演能空間は二間半四方程度となり、演目によっては更に小さく舞わざるを得ないこととなる。天井高17,1尺の棹縁天井の本舞台を中心に南北両方向へ脇正面見所天井高16,1尺、出入り口脇見所天井高10,0尺と、遠離るに従って天井が低くなる構成で、空間のヒエラルキーが形成されている。能の舞台に求心性があると同時に本殿への空間軸が明快である。黒川能の独自性が建築空間構成に表現され、柱、梁、束、貫等の建築構造体による木組みが民家の吹抜けと同様に演能と観能の空間を壮観なものとしている。本舞台に対して直角に幅一間全長三間の高欄付きの橋掛りが続き、奥に一間四方の鏡の間がある。高欄に地覆が付いているため、足元の動きが見えにくく、能役者の表現が十分に伝わるか気がかりになる。鏡の間に隣接して三間二間の楽屋があり、拝所脇より出入りできる。鏡の間へは通常楽屋より入るが、1,4尺の段差のある見所と引違い戸で繋がっている。床板の貼り方向は本舞台、橋掛りとも江戸城表能舞台と同じである。拝殿に飾り金物、彫物、組物等は施されていないが、絵馬、歴代能役者肖像画、能組が掲げられ、提灯等の照明器具も付けられ、彩りを添えている。採光は南北両側の上方と東側の畳敷き見所後方の窓と限られるため薄暗い室内となり、非日常的世界を巧みに演出している。

4. 能郷白山神社

能郷は越前・美濃境に聳える能郷白山の東南麓に位置し、根尾川に沿った段丘上に拡がる戸数40余の集落で、白山神社はその集落の中央に鎮座する。能郷の能狂言と池田の田楽能舞の芸態は違いますが、地理的に近接し、共通の能に関する伝承¹⁴⁾がある等関係が深い。4月13日の午後に演じられる能郷の能狂言は世襲制で能方、狂言方、囃子方が定まっており、16戸で口伝により伝承¹⁵⁾されてきた。神事能は現在18番伝承されており、毎年「式三番」に続いて、能3番、狂言2番が奉納され、能・狂言の謡いや所作等の芸態に能郷の独自性があり、囃子方は大鼓1、小鼓1、笛1で太鼓は含まない。五穀豊穡・家内安全を願う祈禱的な神事と厳格さ¹⁶⁾が、で能狂言を支えた要因と言われるが、近年では時代の流れによって神事能の維持が難しくなり、氏子・行政一体となった保存継承が行われている。能郷では古能面20面、狂言本(慶長3年)、能狂言装束類が文化財¹⁷⁾として保存され、毎年、保存会によって式三番と能三番、狂言二番が祭礼に奉納されている。平成11年竣工の現舞台が出来るまで、拝殿の前に4月13日の午前に組み立てられ(一時はレールによる移動式能舞台)、二間四方の猿楽殿と呼ばれた組み立て式の仮設舞台(図-4)で神事は奉納された。組み立て式能舞台、移動式能舞台とも約8畳¹⁸⁾の規模で前6畳で舞いを、後2畳で囃子、謡いを行い、背景に「文化四歳丁卯三月吉日」とある幕が張られ、舞台正面左側に橋掛り(出入りの機能のみ)が付き、幕の背後は楽屋になっている。組み立て式舞台のため、飾り金物や組物はなく、装飾性のない簡素で素朴な造形となっている。

現在の能の舞台は二間半四方の平面形式で、二間半×二間に後方半間の後座が付き、以前より僅かに大きい、芸態が継承された舞台であるため、機能上の空間構成は変わっていない。舞台は桁行一間、奥行一間、一重、切妻造、銅板葺きである。橋掛りはなく舞台への通路が後座脇にある。舞台の床板は正面へ向って貼られ、後座部はそれに直交している。床板貼り方向は江戸城表能舞台と同じである。舞台の柱頭組物は大斗肘木で構成され、釘隠等の飾金物はない。三方の梁上に板葦股が据えられている。正面の鏡板は白木で能画は描かれず、演能時に幕が張られる。正面妻飾として破風に飾金物はないが、豕扱首、六葉金物付き懸魚が施されている。舞台と後座部は化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成となっている。桧材の床板は足拍子を響かせるための太鼓の皮のような構造である。天井と床は能舞の音響効果を考慮した造形となっている。能狂言における能郷の場所性を読む時、古風な芸態を継承する神事能の仮設的組み立て式舞台の形姿を想起する。

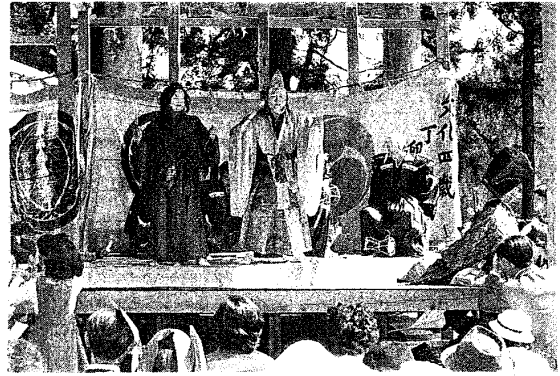


図-4 組み立て式舞台(本巣市教育委員会)

5. 春日神社

大和地方より関へ移住した刀鍛冶が郷里の春日神社の御神体を勧請したことに起源をもつと言われている春日神社¹⁹⁾では関刀鍛冶が中心となって明治維新まで神事能が奉納されており、使用された61の能・狂言面と能装束²⁰⁾が残されている。慶安2年(1649)の「神事能座席図」、宝暦14年(1764)の「能狂言座席并番組記録」、嘉永元年(1848)の「藤掛長蔵耳順祝賀能留書」の記録²¹⁾によって、神事能に関わる階層の勢力変化はあるが、鍛冶職が中心的役割を担ってきたことがうかがえる。現在の関市中心部より南へ僅か入ったところに春日神社の社殿がある。鳥居から北へ参道がまっすぐ伸び、舞台と拝殿・本殿が相対しながら、能の舞台、拝殿、本殿が軸線上に並ぶ構成となっている。祭礼時、能の舞台は橋掛りによって鏡の間である楽屋に繋がり、橋掛りは普段外され、解体保存されている。舞台と橋掛りの角度は70度である。棟札²²⁾によると、寛文5年(1665)に領主大島曇八義近及び関惣中によって再建された。伊勢湾台風の大破によって昭和36年(1961)に修復された。舞台に鏡板はなく、四方から観能することができる。外観は土台の上に柱が据えられているようであるが、柱は礎石上に直に立てられ、床框を回して柱へほぞ差し鼻栓固めとしている。類例として伏見城に設けた組み立て式の舞台と伝えられる江戸時代前期の沼名前神社能舞台²³⁾がある。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造銅板葺(旧桧皮葺)で、庇造、葺きおろしの飾金具が施されていない高欄をもつ3尺幅の脇座が張り出している。床板は本舞台、脇座、後座とも正面へ向って貼られている。後座のみ江戸城表能舞台の規範と異なり、天正9年(1581)の造営とされる西本願寺奥能舞台²⁴⁾と同じ貼り方向である。床下に音響効果用の瓶はない。本舞台と後座は化粧屋根裏天井で、傾斜30度の舟底と傾斜20度の片流で構成されている。屋根勾配と化粧勾配との間にほとん

ど差がなく、屋根裏を構成する部材が屋根を支える構造である。天井の化粧勾配が深く人々を内包する空間構成となっており、四方吹通しの開放的な端正な造形を示している。

舞台の柱頭に組物はなく、正面の虹梁には袖切に渦巻形の文様が彫り込まれ、下部に肩が施され、その上に大瓶束が据えられている。その軸組は構造材であると同時に舞台空間の簡素な造形の中で数少ない装飾的な表現となっている。背面の切妻面は通常入母屋造に用いられることが多い木連格子であり、西本願寺奥能舞台と同様である。正面妻飾として、破風に飾金物はなく、六葉金物を付した燕懸魚ひれ付が施されている。西本願寺奥能舞台と類似点も多く、能の舞台の古式を示していると考えられる。

6. 寸法にみる能の舞台

現存する最古の能舞台の西本願寺奥能舞台〔天正9年(1581)〕と式楽の能舞台の完成期における江戸城表能舞台〔万延元年(1860)〕と比較して、鶯甘神社における能の舞台空間は、演能と観能の床・天井(天井高12,9尺)が同じであり、床より8,7尺の高さに渡された水引梁(梁上は中束のみで欄間はない)が室内空間を分節するのみで、象徴空間としての常設の能舞台はなく、見所の空間と一体となっている。二間半四方の演能空間は式楽の舞台が三間四方に対してひとまわり小さい。

鶯甘神社と同じ拝殿形式の能の舞台をもつ黒川春日神社の三間四方の本舞台は、後座・脇座の機能が入り込み、演能空間として二間半四方程度となる。当屋²⁵⁾の舞台は二間×二間半や二間×二間が多い。舞台床高は江戸城表舞台より低く、室内における演能と観能の一体空間に効果がある。拝殿内の舞台空間から南北両外側へ、空間のヒエラルキーに従って、柱は0,81尺、0,69尺、0,58尺と細くなっていく。橋掛り全長は舞台間口とほぼ同じで、西本願寺奥能舞台の二分の一、江戸城表能舞台の三分の一である。幅は西本願寺奥能舞台より広いが、後方が壁であるため視的拡がりの効果は期待できない。舞台開口縦横比をみると、法印柱で二分される正面で0,96、脇正面で1,31で、江戸城表能舞台の1,77より小さく、水平、垂直材の木組みによる堂々とした造形の舞台空間である。

白山神社における能の舞台は、後方半間に囃子方、地謡方が座し、演能空間のみで二間四方程度の舞台である。能舞空間の奥行が二間程度と深くなく、演能と観能の空間の一体性を創出するところに能郷の神事能における舞台空間の継承をうかがわせる。現舞台の主要部材は桧で構成され、前の杉材による舞台と異なり、本格的な造形である。柱太は西本願寺奥能舞台より僅かに大きく、舞台床高は江戸城表能舞台より高く、舞台正面開口の縦横比は1,55で江戸城表能舞台の1,77より小さく、上昇感のある舞台空間である。

関春日神社における能の舞台は二間半四方で江戸城表能舞台より小さいが、後座は江戸

表-1 能の舞台主要寸法(単位:尺)

	鶯甘神社	黒川春日神社	能郷白山神社	関春日神社
舞台間口	(18,0)	18,8	15,0	15,6
舞台奥行	(16,6)	18,6	11,4	15,6
後座奥行			3,6	8,9
脇座の幅				3,0
舞台床高		1,4	3,3	2,4
水引梁高		8,9	9,2	11,2
舞台柱太		0,81	0,73	0,65
橋掛り幅		6,2		5,8
橋掛り長		18,6		29,6

() 内は仮設舞台寸法

城表能舞台、西本願寺奥能舞台と同程度の奥行である。柱太は西本願寺奥能舞台とほぼ同じであり、舞台正面開口の縦横比は1,33で西本願寺奥能舞台の1,67より小さく、四方吹通しであるため、細やかな形姿に映る。西本願寺奥能舞台と同程度の床高の舞台は地面に近く、空間構成は神事に相応しい端正な舞台である。橋掛りの幅は西本願寺奥能舞台とほぼ同じで、全長は四分の三である。

7. まとめ

神事能の舞台は、武家の式楽としての能による本格的な三間四方舞台よりひとまわり小さく、その多くは演能空間として二間半四方、二間四方と考えられ、本舞台に後座・脇座の機能が取り込まれることが多い。豪華な装飾はなく簡素であり、端正な造形がなされている。演能と観能の場を一体化する空間構成であると考えられる。武家の式楽としての能の舞台以外は必ずしも江戸城表能舞台の規範通りでなく、雪深く寒さ厳しい地域における能の舞台として拝殿内に設えられる等、伝承する神事能に相応しい独自の舞台空間を創出している。

謝辞 調査に際して、下村武義氏(池田町)、山口哲夫氏(池田町)、遠藤重和氏(黒川)、難波玉記氏(黒川)、中野徳和氏(本巣市)、洞口義明氏(本巣市)、長谷川徹氏(関市)、伊佐地金嗣氏(関市)に多大なご協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 後藤淑「能楽の起源」木耳社 1975
- 2) 星野紘、芳賀日出男「日本の祭り文化事典」東京書籍 2006
- 3) 水海の田楽能舞保存会「能楽の里特集号」池田町教育委員会 1986
- 4) 池田町史編纂委員会「池田町史」池田町役場 1977
- 5) 杉原丈夫「新訂越前国名蹟考」松見文庫 1985 p283~288
- 6) 山崎楽堂「能舞台」『野上豊一郎編「能楽全書」第4巻』東京創元社 1979 p12~22
- 7) 県立図書館本「今立郡神社明細帳式冊ノ内式」(2/3)1991
- 8) 下村敦氏(元能役者)の話
- 9) 太田博太郎編集 西和夫「本願寺書院」日本建築史基礎資料集成17 中央公論美術出版 1974 p59
- 10) 真壁仁「黒川能」日本放送出版協会 1971
- 11) 本田安次「王祇祭見学記」『本田安次著作集日本の伝統芸能第16巻』錦正社 1998
- 12) 馬場あき子、増田正造、大谷准「黒川能の世界」平凡社 1985
- 13) 桜井昭男編集「黒川村春日神社文書」東北出版企画 1998、戸川安章「櫛引町史黒川能史編」櫛引町 1974
- 14) 曾我孝司「白山信仰と能面」雄山閣 2003
- 15) 根尾村「根尾村史」1980 p542~543
- 16) 谷川健一「日本の神々第9巻」白水社 1987 p58~59
- 17) 15)に同じ p545
- 18) 能狂言保存会前会長溝尻清治氏の話、溝尻邸広間8畳柱間約12,5尺
- 19) 金幣社春日神社「春日神社由緒略記」
- 20) 関市教育委員会「新修関市史考古・文化財編」ぎょうせい 1994
- 21) 国立能楽堂調査養成課「関・春日神社の能面と能装束」日本芸術文化振興会 1994
- 22) 関春日神社文化財保護委員会「文化財のかすが」1975
- 23) 重要文化財沼名前神社修理委員会「重要文化財沼名前神社能舞台修理工事報告書」 1959
- 24) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942
- 25) 本田安次「王祇祭見学記」『本田安次著作集日本の伝統芸能第16巻』錦正社 1998

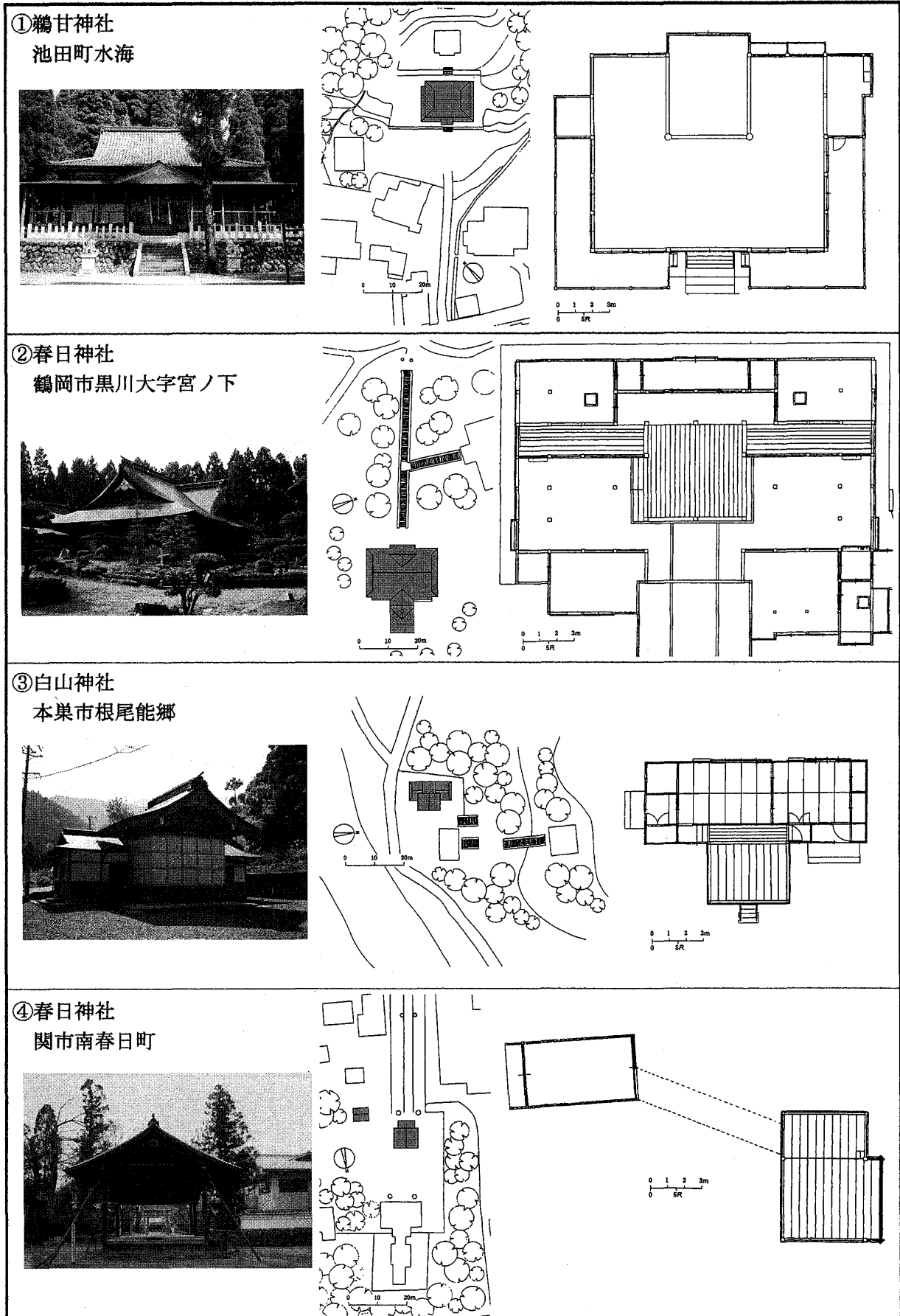


図-5 能の舞台配置図・平面図